

TENTI・TODAY			1
会員の広場			1
随筆	「日々をいとおしみて」より「失ったもの」	宮川典子	2
歴史	「了解日本(日本を知る)」(9)華やかな江戸文化	愈彭年	3
歴史	(5)杉原千畝の日本通過ビザを持って日本に押し寄せて来たユダヤ難民の人名保護と彼らの最終目的地への渡航に協力した日本人たち	佐川雄一	7
回顧	有楽町慕情(6)「第一生命館、難工事」	津田孚人	10
事務局			12

TENTI TODAY

桜が終わり躑躅の季節になりました。桜の季節には、毎年ご挨拶(?)に都立・水元公園、中央線・国立に出かけることにしていましたので今年も出かけました。天候がよかったせいか、良い花見が出来ました。花を愛でることの出来る日々、感謝です。

3月下旬、国立に行きました。大学構内で、母親らしい女性と一緒に学生を見掛け「新入生?」と声をかけると、「卒業生です」との返事。IT関係の会社に就職決定し、4月から東京勤務、九州から出て来た母親を案内しているとのことでした。お祝いを言いましたが、スタートラインに立つ若者に、やや複雑な感情を持ちました。

バスケット部の練習を見て、いつものように駅前にあるロージナ茶房で数名の選手と会食。普通盛でも大盛の量があるという店員の声を意にせず、選手たちは躊躇せず大盛を注文。往時の自分の姿が重なり、またもや複雑な気分となりました。

大学は大きく変わり、学部も今年から、ソーシャル・データサイエンス学部が新設されました。世間では、「チャットGPT」の是非が盛んに論じられています。過去の体験だけでは、若人との対話、接触が難しくなりそうです。世の中の変化に対応することの必要性は、年齢に関係なくありそうです。

4月初め、新三木会主催で矢野前財務次官の特別講演会が如水会館でありました。アベノミクスに批判的、フリーになったせいか一段と論調が鋭くなりました。現行の財政赤字は気にしない、国債を発行し日銀が買い取ればよい、とする状態は、アウト。もし続けると日本の金融、経済の破綻は近いと、資料を示し詳しく説明がありました。リフレ派と言われる経済学者も、最近政策の間違いを認めているそうです。日銀の新総裁の動きが注目されますが、消費税アップの政治的決断が一番の注目になりそうです。

「安倍晋三回顧録(中央公論新社)」を読んだ(2)は、筆者の臺一郎さん、体調不良につき、今回はお休みします。

会員の広場

エッセイ集 宮川典子(94歳) 「日々をいとおしみて」(2022年11月)より

「失ったもの」

小学校の卒業アルバムも女学校のもの、私の手元にはない。しかし共に学び遊んだ級友の顔は、今もなつかしく思い出す。

昭和20年3月9日の夜、東京下町に米軍の大空襲があった。警報発令直後に既に上野駅近くの我が家から東の空が真っ赤なのが見えた。前年日本統治領であったサイパン島が米軍に占領されて、本土への空襲は次第に激しくなった。各家庭は敷地内に防空壕を掘り、食料や日用品を蓄えていた。いざという時は家族もその中に避難する。

その日はいつまでも敵機は去らず、やがてお腹に響くB29爆撃機の異様な音が近付いて来た。家族全員防空壕に入り「どうか助かりますように」と必至に祈っていた。私はその時不意に思い出した。母から「大切な物は防空壕に入れて置きなさい」と常々言われていたのに、アルバムを机の上に置きっぱなしだったのだ。急いで取って来ようと二階の勉強部屋に入りかけた時に「どかん」と大きな音がして家が揺れた。父が「防空壕から出ろ」と叫んでいる。あと二、三步でアルバムに手が届くのに、命が大切と引き返してしまった。四軒先の家に焼夷弾が落とされ強い北風にあおられて、次々家が焼けてゆく。生まれ育った自分の家が焼け落ちるのを涙を流しながら見つめていたが、家族8人が無事であったのが何よりだった。

その時私は女学校四年生、三月末に卒業式を控えていた。一面の焼野原の中、鉄筋の校舎は残ったが、前以て卒業記念写真を撮ってくれた店が焼失、そのフィルムも灰になってしまった。空襲の犠牲になった級友、慌ただしく地方へ疎開して行った級友ありで、撮り直すどころではなかった。

一方焼けてしまったアルバムには、小学校卒業記念写真はきちんと貼ってあった。その上カメラ好きの父が子供たちの日常をこまめに写し、現像まで自分の手でやってくれた多くの写真、それ等はもう二度と見ることはできない。

しかしこの掛け替えのない貴重なアルバムを失ったことは、その後の生活に大きな教訓を与えてくれた。私は子供の頃からぐずで面倒臭がりやであった。運動会のかげっこだけは毎年一等賞を取って来るので、妙な子だと皆から言われてきたが、初めて気付いた。やるべき事は億くうがらずにさっさとやるべきだと。しかし生まれつきの性分はたやすく直るものではない。結婚後も夫から母と同じような注意を度々受けた。自分としてはかなりの努力をしたつもりであったのだが……

あの空襲の日から今年七五年目、ようやく人並みに身辺整理ができるようになった私、それはまさしくあの大切なアルバムを失ったのがきっかけであった。

「江戸文化の中の明と清の文化」

華やかな江戸文化

江戸時代は日本独自の封建社会で、政治、経済、文化の発展、特にあらゆる形態の文化の発展があった。江戸幕府は、武士、農民、実業家の身分制と兵農分離を行い、士(=武士)と実業家(=職人、商人)は町に住み、農民は田舎に制限された。

武士階級は他の階級の上に立つ支配階級であり、独自の思想、倫理、生活様式を持つ武家社会を形成していた。町に住む商工業者は「町民」と呼ばれ、「町社会」を形成し、そこでも独自の思想、倫理、生き方を持っていた。農村に固く結びついた農民は、封建社会を経済的に支え、農民社会を形成し、独自の思想、倫理、生活様式も持っていた。社会全体が、武士社会、町人社会、農民社会の三つに分かれていたのだ。

江戸、大坂、京都は三大都市と呼ばれ、それぞれの地域に「城下町」(領主の屋敷を中心に発展した町)、「門前町」(神社や寺院などの門前にできた町)、「港町」(商業港の町)、「宿場町」(郵便局のある村)がまとまってあった。

幕府の所在地である江戸の人口は、町人 52 万 6 千人、武士 100 万人以上(1723 年)、大阪は 50 万人(1743 年)、京都は 35 万 9 千人(1715 年)であった。金沢、鹿児島、名古屋の城下町、長崎、堺の商業都市も人口 5 万人を超えていた。

時折、農民など社会的弱者による反乱はあったものの、戦国時代に比べれば、江戸時代は大きな戦争もなく、国家もよく統治され、社会も比較的安定しており、人口も増え、生産性も急速に高まり、その結果、経済社会も大きく発展し、18 世紀には資本主義の芽が現れてきたのである。

江戸時代の文化は、武家社会の「武家文化」、町人社会の「町人文化」、農民社会の「農民文化」の3つの文化があった。3つの文化は互いに影響を受けながらも、身分の制約に応じて独自の文化を発展させており、特に町人文化の発展は色濃く、身分の制約を受けながらも、町人が当時最も豊かで活力に満ちた階級であったことを物語っている。

支配的な立場から学問を独占していた武士は、その支配を維持するための思想の構築に力を注ぎ、そのために中国の朱熹学(朱子学)を正式学問として導入し、日本の新儒学である朱子学を作り上げたのである。朱子学は、自然は理性であるという考え方を提唱し、「居敬窮理、格物致知」、「仁義礼智信」の五常の徳、特に君臣父子の上下関係の秩序を重視して実践した。

幕府は昌平坂学問所(将軍直属の家臣の子弟のための学校)を、地方領主は藩校(領主の家臣の子弟のための学校)を開設し、武士階級に朱子学を教育していたのである。岡山藩の藩学を始めとして、会津の日新館、米沢の興讓館、佐賀の弘道館、熊本の時習館、鹿児島の造士館など、300 を超える藩校が作られた。

5 代将軍徳川綱吉は儒教を尊び、論語を教え、湯島聖堂（江戸湯島孔子廟）を建立し、孝子表彰制度を確立して儒教を行政に反映させた。徳川綱吉の「生類憐みの令」は、聖徳の世の仁慈を動物に波及させるために制定したが、担当した手下が正しく執行しなかったため、結果民衆を苦しめることになり、暴虐な政治と悪名を得ることになった。

儒学者としては、藤原惺窩、林羅山、木下順庵、室鳩巢、山崎闇斎、柴野栗山、尾藤二洲らが有名である。

時代が下ると、儒学者の中にも朱子学や封建的な支配や倫理を批判する者が現れ、例えば伊藤仁斎は朱子などの注釈が孔子や孟子の古い教えに反していると批判し、原典の『論語』『孟子』に直接賢人の道を求め、日常の経験に基づく倫理を説き、『童子問』を著作し、町人の社会生活に人情や信頼、寛容などの倫理が必要であると説いたのだ。

安藤昌益は『自然真営道』を著し、当時の身分制度や儒教・仏教を批判し、誰も支配・統治されず、誰もが農業生産に従事する「自然世界」を提唱した。

また、仏教儒教学的の権威を批判した山片幡桃の「夢之代」、重商主義を唱えた本多利明の「経世秘策」、国学を構築した本居宣長の「古事記伝」などが書かれた。

中国医学は早くから日本に伝わり、日本人は中国医学を「漢方」と呼んだため、中国の医者や漢方薬を「漢方医」、「漢方薬」と呼ぶようになった。江戸時代、漢方医学は大きく発展し、多くの流派が生まれた。

古医方（日本の漢方処方流派の一つ）は、名古屋玄海が創始したもので、張仲景の「腸チフス論」など唐代以前の漢方医学書の活用を提唱し、後の陰陽五行説を排除し、臨床実験を重要視している。前野良沢と杉田玄白による日本最古の西洋解剖学書である「解体新書」があり、本草学者・貝原益軒は『大和本草』を著した。

多くの儒者や医学者（後に国学者や外国人学者も）が私塾を開いて門人を集め、独自の学問観を展開し、自校を拡大し、私塾は国民の重要な教育・研究機関となっていったのである。

例えば、儒学者の伊藤仁斎は、久邇派を創設した後、自ら久邇堂を開設し、全国から門人を募った。広瀬淡窓は私塾「咸宜園」を開き、四書五経のほか、数学、天文学、蘭学（西洋学）、医学などを教え、生徒数は 4,000 人を超えた。

1685 年、渋川春海は日本人自身が編纂した最初の暦「貞享暦」を編纂し、これが「国暦」と呼ばれるようになった。貞享暦が採用される以前は、日本は中国の暦を使っていた。暦の採用後、3 回の改暦が行われたが、いずれも日本人自身によるもので、1842 年の 3 回目の改暦が「天保暦」である。現在「旧暦」と呼ばれている。

商工業の発展とともに、町人の力が急速に高まったため、町人文化が生まれた。文化は町民の生活と密接に結びつき、彼らの喜びや悲しみを反映し、どのように振る舞い、どのように発展し、どのように生きてきたかを探っていた。町人文化は、17 世紀後半から 18 世紀前半の「元禄文化」と、18 世紀後半から 19 世紀前半の「化政文化」の 2 つの時代に分けられる。

京都・大阪周辺を中心に発展した元禄文化の特徴は、古典的な貴族文化の「雅」と町人社会の「俗」を吸収し、「雅」と「俗」が融合していることである。化政文化は、

江戸を中心とした町人文化が中心で、政治的・批判的な生活や娯楽を特徴としていた。

町民の文化は幅広い分野に及び、その形態もさまざまで、多くの国宝級の名作を残している。

美術工芸の分野では、本阿弥光悦の『船橋蒔絵硯箱』、俵屋宗達『風神雷神図屏風』、尾形光琳の『八橋蒔絵硯箱』、『紅白梅図屏風』、陶芸家の尾形乾山の『色絵梅花文茶碗』、がある。

日本画では、巨匠円山応挙の『藤花図』『雪松図屏風』、松村月溪の「柳鷺群禽図屏風」、伊藤若冲30幅の『動植綵絵』、文人画では、渡辺華山、田能村竹田、池大雅、与謝蕪村、洋風銅版画では司馬江漢、亜欧堂田善がいる。

染色工芸方面では、宮崎友禅齋が新しい染色技術や図柄を開発し、「友禅染め」（京都友禅染色）を生み出し、「京都西陣織」（京都西陣の高級絹）をより豪華にした。

印刷出版方面では、図解百科事典『人倫訓蒙図彙』や女性啓蒙のための百科事典『女用訓蒙図彙』の出版など、大きな発展があった。

菱川師宣の「岩本絵集」「和国百女図」、鳥居清信の俳人版画、西川祐信の「百人女郎図」、鈴木春信の「座敷八景」「風俗四季歌仙」、喜多川歌麿の「婦女人相十品」「歌選恋之部」など、都市風俗や女流を描いた浮世絵が盛んとなった。

北川景「女の顔十枚」「恋歌の部」、歌川豊国「役者舞台之姿絵」、葛飾北斎「富嶽三十六景」、歌川広重「東海道五十三次」、「名所江戸百景」。

園芸や華道も流行し、園芸書籍として「抛入花伝書」「錦繡枕」「花壇地錦抄」などがあった。

音楽に関しては、日本で最も早く音楽入門書、「糸竹初心集」が出版され、中根元圭が音楽理論の本「律原發揮」を書いている。

長唄（三弦曲）が流行し、「勸進帳」「越後獅子」「吾妻八景」などの人気曲は、古典曲として定着している。

日本三大古典戯曲の一つである人形浄瑠璃は、辰巳八郎兵衛や吉田文三郎といった名人芸の登場、竹本義太夫による独特の曲調「義太夫節」

劇作家近松門左衛門による一連の人情劇は、「曾根崎心中」「冥土の飛脚」「心中天網島」「女殺油地獄」「国性爺合戦」など、社会の深い矛盾を映し出す作品を発表している。

同じく日本三大古典戯曲の一つである歌舞伎は、有名な作家や役者がいて、内容も形式も豊かになり、舞踊や音楽も進歩的になっている。

松永貞徳、西山宗因、松尾芭蕉を代表とする詩歌「俳句」や、人間の感情や風俗、生活の弱点、世の中の欠点や問題点を素朴で面白く、機知に富んだ皮肉と遊び心のある話し方で表現した「川柳」、世の中の問題点を歌った「狂歌」（滑稽で低俗な和歌）もかなり発展した。

文学では、井原西鶴が始めた浮世絵草子（庶民のための絵入り小説）があり、代表作として「好色一代男」「世間胸算用」などがある。

見聞記、旅行記、漫遊記など紀行文学が盛んになり、各種作品が相次いで世の中に出、大衆に大歓迎された。特に、司馬江漢の「西遊旅譚」、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」、松尾芭蕉の「奥の細道」は有名。

挿絵入りの「草双紙」（挿絵入りの通俗読み物）や、「洒落本」（遊里での遊びと滑稽を描写した読み物）が出現し、「遊子方言」、「辰巳の園」「通言総籙」等がある。「寄席」（曲芸、講談、雑技）は大衆娯楽として普及。

初等教育場所としては、「手習所」が普及、百姓も学べ、漢字の読み書き、算盤、漢籍（中国書籍）、謡曲、裁縫などを学んだ。

また同時に、各種芸事の「稽古場」があり、「茶道」「花道（插花）」「香道（熏香聞香套数）」「和歌、習字、絵画、連歌（日本詩の一種）」「俳諧（日本詩）」、囲碁、将棋（日本象棋）、等々を学んだ。

この当時、日本の文化的水準は相当高く、各種社交活動が多岐にわたって行われて、毎年、中国と同様に定期的に花火の打ち上げなど行われていた。

東都歳時記に詳しく記録されている毎年恒例の中国花火や、伊勢神宮を参拝する「伊勢講じ」、富士山を参拝する「富士講じ」などの活動など、多くの社交行事が行われた。また、「善光寺参拝」や「金毘羅参拝」（金毘羅は香川県の寺院）など、中国と同様の巡礼も多くある。

下層階級の人々が本を借りて読む貸本屋の出現と発展は、町人文化の大衆化、創造に大きく貢献した。

農民の文化は農民と農業生産を反映したものであり、越中地区（現富山県）の僧侶・任誓在（大井廉）は『百姓鑑』を、河内（現大阪府）の地主・河内屋可正（高松）は、家訓に農民の正しい姿を記してある。

初期の出版物には、『人名録』『作物春秋』『会津農書』などの農書、後には日本の農書の古典とされる宮崎安貞の『農事全書』、大蔵永常著の『農具便利論』、『広益国産』がある。

そして平瀬鉄斎編著・長谷川光晴画の『日本山海名物図会』は後の産業技術史研究の重要資料となった。著者不詳の『日本山海名産図会』は、各地の農林水産業、酒造業、陶磁器、織物などを図解で紹介している。

次回、江戸文化の中の明・清文化とつづく

リトアニアで1万人のユダヤ難民に日本通過ビザを発給、
彼らを窮地から救済した日本の外交官；杉原千畝とはどんな人だったのか

佐川雄一（86歳）

第5回

杉原千畝の日本通過ビザを持って日本に押し寄せて来たユダヤ難民の人命
保護と彼らの最終目的地への渡航に協力した日本人たち

杉原千畝が発給した日本通過ビザを所持する大量のユダヤ人がシベリア鉄道で日本に逃れ、さらに日本から米国・カナダ、パレスチナ、他に出国したが、その裏には、直接・間接的に、陰で支えた日本人が多数いたことを忘れてはならない。杉原千畝一人の行動ですべてが進んだわけではない。以下にいくつかの具体例を示す。

1) 親米派；東郷茂徳大使のモスクワ駐在

杉原からビザの発給を受けた多くのユダヤ人が、1940年9月から翌年の4月の間に、シベリア鉄道でソ連を横断して日本に渡った。言うまでもないが、ソ連政府がユダヤ難民に大量のソ連通過ビザを発給したが故にシベリア鉄道で西から東に移動できたわけであるが、それにしても、なぜ！多くの避難民がこの時期に日本に辿り着くことができたのか。

この当時、親米派の東郷茂徳がソ連大使（在任期間：1938年11月～1940年10月）としてモスクワにいたことがユダヤ人のソ連通過を助けたとも考えられる。そして、1941年4月、日本の松岡洋右外務大臣とソ連邦のモロトフ外務大臣の間で日ソ不可侵条約が締結されたが、この条約発効が、ソ連と日本の協力を促す動機になり、ユダヤ難民を無事に通過させる契機になったとも解釈される。この辺りは確証があるわけではなく、時期的にも大量の避難民がシベリアを通過した時期と必ずしも重なっていないが、ユダヤ人の移動を若干なりとも容易にしたかもしれない。即ち、日本の意思決定機関が無意識のうちにユダヤ難民救済の役割を果たしたとも考えられる。

2) 全米ユダヤ人協会から協力を要請された JTB は、ウラジオストク経由敦賀、敦賀経由神戸・横浜へとユダヤ人の輸送を支援した

1940年のことである。米国ユダヤ人協会からジャパン・ツーリスト・ビューロー（現在の JTB）ニューヨーク事務所に突然の協力要請があった。『ポーランドに住んでいるユダヤ人が、シベリア鉄道を使って日本に避難しているが、ウラジオストクから海路日本に渡り、日本を経由してアメリカに来る、そこでウラジオストクから日本、日本からアメリカまでの彼らの輸送を引き受けてもらえないでしょうか』というお願いであった。

ニューヨーク事務所の一存で決められる話ではなく、本社と相談することになった。ポーランドを脱出し、隣のリトアニアに逃げ込んだ多くのユダヤ人が日本の通過ビザを求め、カウナスの日本領事館に押しかけていたのもちょうどその頃だった。ここで世に知られる『杉原ビザ』が生まれるのだが、このときの主人公が領事代理の杉原千畝であることを、JTB ニューヨーク事務所は知る由もなかった。

JTB がユダヤ難民救済協会 (Hebrew Immigration Aid Society) から受託した業務は、ウラジオストクに到着した難民を敦賀経由神戸と横浜に送り届けることだった。そのための経費を“協会”が JTB に払い、JTB の職員がウラジオストクから神戸と横浜に送り届ける側面的サービスを船上・陸上で連携して行う作業であった。

彼らが、支援した難民の数は 15,000 人に達し、難民のウラジオストク-敦賀輸送にあたったのは定期船；天草丸 (2,346 トン)。この定期船に最も深く関わった JTB 大迫辰雄氏は 1940 年後半から 1941 年春にかけて毎週 1 回 (片道 2 泊 3 日の旅) の割で 20 数回にわたって日本海を往復、添乗幹旋にあたったという。杉原千畝の日本通過ビザでウラジオストクまで来たユダヤ人を敦賀に、そこから神戸・横浜に送り届ける作業には JTB の社員たちが大きく関わっていたのである。

3) ウラジオストク総領事代理；根井三郎の協力

杉原が発給した日本通過ビザを持ったユダヤ人はシベリア鉄道で、次から次へとウラジオストクに到着したが、ウラジオストク総領事代理；根井三郎 (杉原と同じハルピン学院卒、1 年後輩) は、[外務省の訓令](#) (最終目的地が不透明なユダヤ人の乗船を拒否する) を無言で無視した。『公館が発行したビザには日本の威信がかかっている。これを無効にすれば、日本は国際的信用を失う』、これが根井三郎の判断であった。ユダヤ人のビザに杉原千畝の署名を見つけると特に喜んで日本行き通過を認めたという。

さらに皮肉と言うかこんな話がある。カウナスの後、杉原が次に赴任したプラハの総領事館で杉原から日本通過ビザの発給を受けてシベリア鉄道で日本に向かっていった少年；ジョン・ステシンジャー (その後、米国に渡り、テキサス州のトリニティ大学で国際関係論を教えている) がいたが、鉄道の中で隣の日本人からとても親切にされた。その紳士の名前は、真鍋良一。アドルフ・ヒトラーの著作『マインカンプ (我が闘争)』の翻訳者であった。

4) 日本有数のユダヤ通、ヘブライ語学者；小辻節三の尽力により、ユダヤ人の対日滞在期間が延長され、その期間内に米国のビザを取得、無事、出国できた

満鉄総裁であったとき、ユダヤ人対策に頭を痛めていた松岡洋右が、米国で学んだ日本有数のユダヤ通、ヘブライ語学者；小辻節三を満鉄総裁室顧問として小辻の知恵を借りることになった。その小辻に後年、神戸のユダヤ人協会から懇請が届く。

話は、リトアニアから避難してきた神戸在留ユダヤ人の日本滞在ビザが 10 日間切れてしまう、その間に、米国・カナダのビザ取得は不可能、滞在期間を延期していただきたい、これが神戸ユダヤ人協会のお願いであった。

小辻は、旧知の松岡 (その時の外務大臣、) を訪ね、事情を説明、協力をお願いした。これが功を奏して、ユダヤ人たちの滞在期間は延び、その間に、ユダヤ難民は米国・カナダのビザを取得、無事目的地に向かうことができた。小辻節三は、すべての経費を自費でまかない、外部からの資金面の支援は一切受けつけなかった。小

辻節三の人道的な行為はその後、イスラエル政府から感謝され、表彰されるとともに、死後、遺体はエルサレムに埋葬された。小辻節三は今、イスラエルに眠る唯一の日本人である。

5) 日本郵船がユダヤ人を米国まで輸送する



日本郵船 日枝(ひえ)丸でカナダに向かう杉原ビザのユダヤ難民

日本から米国へのユダヤ人の輸送でも日本企業が支援した記録が残っている。

ユダヤ人の有力者から協力要請を受けた日本郵船が、楽洋(らくよう)丸(9,419 トン)を使ってモスクワ扱いの 125 名、カウナス扱いの 88 名を乗せて、1940 年 5 月、サンフランシスコに向けて出港した。

この時、コックをしていた今村繁は衰弱したユダヤ人を元気にしようと毎朝 4 時前に起き、ジャガイモ・玉ねぎ・キャベツなどの食材を細かく切って料理して健康を回復できるよう最善を尽くした。

戦後、杉原千畝の夫人；幸子が日本郵船歴史博物館を訪問した時、ユダヤ人から多数の感謝状が届いているが、郵船関係で

こ

んな感謝状があると語られた。『主人が発給したビザで助かったユダヤ人から多くの感謝状が寄せられていますが、その中に楽洋丸の乗船者からのものがあります。その人たちは、自分たちが日本に逃れてきたときはかなり弱っていた。しかし、楽洋丸で出された食事のお陰で体力も回復し、アメリカに到着したときはすっかり元気になっていた。自分たちが現在、こうして元気で働いていられるのも、楽洋丸のお陰なのです、と感謝していました』

日本郵船は楽洋丸の他にも、新田(にった)丸(17,150 トン)、平安(へいあん)丸(11,616 トン)、日枝(ひえ)丸(11,621 トン)でユダヤ人難民をアメリカに輸送している。(左上の写真は、1941 年 4 月カナダに向かう日枝丸)

6) ユダヤ難民に示した日本の出入国管理当局の対応

一部の例外はあるが、ユダヤ難民は一様に、ウラジオストク、敦賀港、神戸、横浜で出入国管理当局から親切な対応を受けていた。生存者の一人は、『日本の出入国管理当局は、通過ビザのチェックで寛大だった』と回想している。

日本政府はナチスドイツからユダヤ難民に対する寛大な措置は慎むべしと警告を受けていたが、神秘的なまでに多くの日本人がユダヤ人に対し差別的侮蔑的な態度をとらなかつた。出入国管理とは別の話になるが、地域住民の中にはユダヤ人に無料で食料を提供する、大衆浴場をユダヤ人に開放する人たちもいた。

有楽町 慕情 (6)

津田孚人(85歳)

第一生命館、難工事

最近街の本屋さんが少なくなりました。本を読む人が少なくなったのが主因と思いますが、本屋で立ち読みという楽しみが失われつつあり残念です。先日、店頭に置かれていた、「帝国ホテル建築物語」(著者・植松三十里・PHP文芸文庫)を、題名にひかれて買い求め読みました。

帝国ホテルは、明治23年(1890年)11月に完成、大正12年(1923年)に本館を建築、完成直後に、関東大震災があり焼失しました。再建築で苦労したのが、軟弱な地盤でした。重量のあるコンクリートの建物を建てるために夕方から穴掘り作業を始め、終えて翌朝になると、泥水が穴一杯と徒労が続きました。一帯は、江戸時代に家康が海を埋め立てさせたところ、地盤は軟弱でした。

現在の日比谷公園のあたりは、徳川氏が入府したころは日比谷村と呼ばれ、江戸湾の海水はこの辺りまで来ていました。現在の日比谷公園のある地域は、江戸城の修築にあたり海を埋め立て、武士の屋敷地にした所で、佐賀藩の鍋島、長州藩の毛利といった有力大名の上屋敷がありました。明治4年、廃藩置県で武家屋敷は取り払われて陸軍の操練場(練兵場)となり、明治22年公園を造ることを決めて、明治36年に開園しました。音楽堂、運動場、テニスコート、花壇、児童遊技場、公会堂など、ヨーロッパ風を取り入れた新しい公園スタイルのさきがけでした。

帝国ホテルの再建工事が難航したのも、土地が埋め立て地だったからでした。江戸時代、日比谷には、日比谷門があり(桜田門より)、現在残っている公園に入って左側の石垣と池は、江戸城内濠の名残り、海の一部を残して濠とし、濠の一部を残して池としていました。

新橋駅の山手線内側、有楽町駅寄りに大鉄塔のある東京電力本社ビルがありますが、ビル建設の時に地下を掘ると大量の貝殻が出ました。新橋界限ももとは海でした。

日比谷から和田倉までの堀端は、通称五合河岸(或いは七合河岸)と呼ばれていたようですが、兵営があり日比谷ヶ原、有楽ヶ原、三菱ヶ原などと呼ばれたようです。

関東大震災で消滅した警視庁の跡地を、第一生命は1931年(昭和6年)に入札で取得しました。新本社の建設工事は難航しました。

入札で、第一生命が4区画のうちの3区画、農林中央金庫が1区画、取得しました。当時、矢野恒太社長(創業者)は、本社としていた京橋角の第一相互館の延べ3500坪の数倍、少なくとも1万5000坪位の規模にという構想でしたので、土地

面積は3区画で1682坪、お濠に面した絶好の場所で、問題はないように見えました。農林中金に、区画の譲渡を申し入れ断られました、結果的には、後に大きな影響を与えました。

農林中金は、第一生命館が竣工を迎える5年前の1933年(昭和8年)に「農林中央金庫有楽町ビル」を竣工しましたが、御堀端に面した「第一生命館」は難工事にぶつかりました。

地質調査のためにボーリングすると70尺までは砂利層を含む軟弱な地盤でそこに岩盤があることが確認されました。そこで建築を地下4階として岩盤にのせることにし、準備調査をして昭和9年の3月に第一期工事の申請を警視庁にいたしました。

計画では、敷地の周囲に鉄のシートパイルを打ち込んで外廓の土を遮断し、敷地内には鉄柱の位置ごとに70尺の丸井戸を百数十本掘って、その中に1本宛柱を建込み、全部の柱の頭を地上でつなぎ合わせて一階の床をつくる。それから順次土を掘り取って二階の床、三階の床をつくっていく。

しかし、警視庁は、敷地が道路を隔てて宮城のお濠に接しているので、この方法ではお濠の水が工事現場に抜けて流れ込む惧れがある、と認可をくれなかった。そこで、当時もっぱら水中工事に使われていた潜函を使う工法を検討することになった。

この工法は、蓋のない大きな箱をひっくり返して地上に伏せたような形のものを鉄筋コンクリートで造り、その中に人が入って土を掘る。掘った土は、天井の窓から外に出す。下の土が取られていくと、函は自分の重みで徐々に沈む。水の出るところに達すると圧縮空気を函内に送り込んで水を抑える。沈下するに連れ、函の四方の壁が周りより低くなるので、土が崩れないように、四方の壁を鉄筋コンクリートで段々と高く継ぎ足していく。この継ぎ足し工事は、沈下と並行して絶えず行われる必要があった。この問題は、秩父セメント(株)が、特別に速く固まる新しいセメントを開発してくれたので解決、毎日、1貨車上野駅まで送り届けてくれて解決した。

実験掘りは、問題なく成功し、全工事許可が出て、敷地を取り囲んで15個の潜函が降ろされ、敷地の外壁は完全にコンクリートの壁で抑えられ、一滴の水も外から入らなくなった。

地下部分の完成は、昭和11年(1936年)4月、工事に参加した人員数は、延べ6万2千人に上った。そして、いよいよ本番の鉄骨工事に取り掛かったが、建物は、地上百尺、地下七十尺合わせて百七十尺の高さを予定した(注:一尺は、30.3cm)。地上七階、地下四階、中二階を入れて十二階の大建築でした。

以上、お濠の端に面していたために、難工事、大工事、となりました。建築中には、建築学会の会員が、六百人余も見学に来た。資材は、原則国産とし、石材は、茨城県稲田の中野健吉さんに、鉄骨は、横河橋梁に発注された。しかし、内壁の大理石は、国内に適当なものが無いので、イタリアに発注された。施工、工事は清水組に委託、社長以下幹部の人たちが、直接タッチした。暖冷房工事は、三機工業と東洋キャリアの二社が指名された。

昭和11年11月、陸軍築城本部の下士官3名が、会社を訪ねてきて地下室を見て行った。続いて、技術将校が来訪、東京市内に非常事態の折に市民が待避できる場所を作ることが必要なので、地下室その他の鉄骨構造をさらに鉄筋を加えて補強するように勧めて行った。

社長の矢野恒太に報告、軍の意向を積極的に取り入れることになり、佐竹築城本部長にその旨伝えた。昭和11年11月11日のことで、この日を境として終戦にいたるまでの期間、日本陸軍との間に、いろいろな形で深い関係が結ばれていった。続きは次号。

なお、前号・541号で、GHQに接收された旧「第一生命館」は1993年に建て替えられ、「DNタワー21」に変身したと、お伝えしましたが、先日、先輩の三浦正純さんが、さらに昨年「DNタワー21」の共同所有者だった農林中央金庫から、その持ち分を全部買い取り、ビルの名称も「第一生命日比谷ファースト」に変わったと教えてくれました。

農林中央金庫は、マイナス金利政策など事業環境の悪化から、「有楽町ビル」を手放したようです。2022年4月1日に第一生命は取得、大リノベーション工事を始めたとのこと。そのとき配布されたプレスリリースで、「最大たるよりも最良たれ」という矢野恒太の考えが紹介されていました。全区画使えるメリットは大きいですが、時代がかわりましたので、どのように利用するか、興味があります。

事務局

天地シニアネットワーク事務局（津田 孚人）

住所：〒116-0001 荒川区町屋3-2-112

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX：03-3819-7651